

造形遊びの親子支援における保育者・教育者養成の 力量形成の成果

—子育て支援活動「あそびの森」の検証から—

児童教育学科 若杉 雅夫

はじめに

東海学院大学短期大学部幼児教育専攻（開設時東海女子短期大学）が「親育ち子育て、学生の心の育成」をテーマに、平成16年度後期に開設した子育て支援活動「あそびの森」も本年度で10年目となる節目を迎えた。この間、平成21年度からは、東海学院大学子ども発達学科も運営に加わり、学園全体で社会的貢献活動に取り組む姿を地域社会に示している。

開設初年度を除き「あそびの森」のプログラムは、毎年平均して12回程度実施している。プログラムのテーマや季節によってバラつきはあるが、毎回150人前後（午前の部と午後の部の合計）の参加者が利用している。ここ数年は、年間延べ1500人以上の地域の親子に遊びのプログラムを提供し続けている。この実績は、「あそびの森」の活動が地域社会に認知され、地域の子育て支援に関して少なからず貢献している証であると考えている。

「あそびの森」は、地域の親子に様々な遊びを体験する機会と場を提供し、その活動の中で親と子が互いに心を通わせ、共に育つことをテーマとしている。さらに、学生の育成に関しても、「あそびの森」の実施活動の中での学びによって、主体性や積極性を育むことができる。また、実習ではなかなか接することができない、親と子の触れ合いや、保護者の生の話をも聞くことができ、保育者としての総合的な人間力を培うことができる貴重な体験の機会と場となっている。「あそびの森」の活動は、幼児教育コースの教育の核となっているのである。

現在に至るまで「あそびの森」に関する研究・報告等は、子育て支援プログラム「子育て親育ち・学生の心の育成」—あそびの森の試み—、

2006年、東海女子短期大学紀要で、実施内容と理念に付いて開設初期に発表した。さらに、初年度から毎年実践報告として、『子育て支援プログラム「あそびの森」の実践報告』を東海女子短期大学・東海学院大学短期大学部紀要に発表してきた。本稿では、平成25年度で開設から10年を迎えた区切りとして、私自身のゼミ（保育ゼミⅠ・Ⅱ・教職実践演習）で実施した、「あそびの森」全20回のプログラムのうちから、毎年継続実施している一つのプログラムを取り上げ、「あそびの森」（保育実習室）の環境整備と共に、そのプログラム実施のための準備、計画、支援に携わった学生の学びと育ちに関して分析・検討し、検証を試みることにした。

1. 検証内容

「あそびの森」のプログラムとして、私のゼミで担当し実施したテーマは、「新聞破り」「スタンプシッター」「ダンボールのパズル絵」「私だけのアンブレラ」「粘土遊びのクッキー作り」の5種類である。その他に、特別活動として幼稚園の交流会で「墨絵」を提供している。「遊びの森」の利用者のサイクルは、2年～3年が平均的な利用年数である。今回取り上げる「粘土遊びのクッキー作り」は、開設から好評を博しているプログラムであり、遊びの森の核となる活動として毎年必ず実施している。その他に、前述した五つのテーマを参加者の利用サイクルを考えながら、同じ遊びが重ならないように、順次組み直して実施している（年2回担当）。

本稿では、まず「あそびの森」の実施のための環境整備（保育実習室を遊びの場として子どもが活動しやすいようにするための危険防止の工夫や室内装飾など）の準備段階の製作活動での学生の気付きや学びに関して検証を行う。次

に、前述した若杉ゼミ（造形）による「あそびの森」の実施プログラムについて、オープン2年目の平成17年度から現在まで8回にわたって開催している造形活動とおやつ作りを合わせた内容の、「粘土あそびのクッキー作り」を取り上げ、積み重ねた実績を基に、「学生の表現（造形活動）分野の親子支援における保育者の力量形成の成果と課題・育ち」に関して、分析と検証・考察を行う。

このプログラムの分析と検証・考察は、実施の内容と学生が記録として記述した「遊びの森活動記録」を核として行う。ここで取り上げた「活動記録」とは、A4用紙一枚に学生が支援した家族構成、支援内容、支援の反省点と成功点、支援して学んだことの四項目に関して、記入・記述する内容になっている。

2. 「あそびの森」の環境整備（室内装飾・危険防止）

「あそびの森」は、保育実習室と併用した施設となっている。学生の学びの場であると同時に、地域の親子に開放された場（原則としてプログラム開催日のみ）でもある。そのために「あそびの森」の室内装飾等は、地域の親子が親しみやすく開放感あふれる空間にすることが求められる。さらに、室内装飾と共に子どもの怪我予防のための危険防止策についても対策を講ずる必要が不可欠である。これらの製作は主に造形ゼミが担当している。

室内装飾と安全対策の製作に当たっては、学生の主体性を促すため、ゼミ担当教員として「あそびの森」での実地調査の時間を設け、前述した目的を達成するための必要条件を明確に伝え、



図ー1 「あそびの森」壁面構成

それ以降は、助言者としてのスタンスで学生に接するように心掛けた。このことによって、学生は計画の段階から装飾性と機能性を考え、その空間に適した壁面装飾等のアイディアスケッチを主体的に練ることが出来た。

設置現場での実地調査、下絵、材料の選択から製作と順を追って計画的に製作を進め、ゼミ生同士の協力体制も上手くとることができ、図ー1に示したように、参加者が慣れない場に和みやすいように、「あそびの森」のテーマを良く表した、大きなりんごの木とリンゴの果実をデザイン化した等身大の大型壁面装飾等を完成させることが出来た。

また、危険防止に何が必要かということも、学生自ら部屋全体を入念に調べ、子どもが転んだときの危険防止としてコーナーや木のロフト、滑り台等の周辺にクッション材を設置する案を考案した。製作に関しても、条件を満たすために適した素材の選択、機能性を考えたデザイン等、すべて学生の主体的活動として推し進めた。この一連の製作活動については、担当教員としての具体的関わり方を綿密に計画して準備したが、こちらの想定以上に、学生は必要事項に沿って、積極的かつ主体的に製作活動に取り組むことが出来ていた。

学生の主体的取り組みが自然に促された原因を考察し下記に示す。

- ① 製作活動の前に、目的を明確化した。
- ② 実地調査に時間を十分にとった。
- ③ 「遊びの森」となる保育実習室が魅力ある空間であった。
- ④ 実際に地域社会の親子が利用する場を整備・装飾するので責任感と意欲が増した。（製作の目的が明確であった）
- ⑤ 担当教員がアドバイザーに徹した。

以上5点が考えられるが、この中でも主たる要因は、教員が学生を信じ活動を見守る姿勢を貫いたこと。次に、地域の親子を実際に招くための環境作りということが、学生の責任感と主体性を自然に引き出したことの2点が主な原因として上げられるであろう。

造形ゼミの学生は、「あそびの森」の室内装飾・危険防止の製作に取り組むことによって、

プログラム実施への心構えが身に付き、そのための計画・準備・実施等に無理なく積極的に取り組むことにつながったと考えている。

3. 実施プログラムの検証と考察

「粘土あそびのクッキー作り」

プログラムは、前期は二年生のみの実施となるが、後期実施のプログラムに関しては、一・二年生が協力して実施する。本稿では、前述したように、毎年後期に連続して開催されている「粘土あそびのクッキー作り」を取りあげ、一・二年生の共同実施から見るそれぞれの学生の学びと成長についてと、学びの相乗効果に関して検証し考察する。

「粘土あそびのクッキー作り」は、前述したように8回連続開催している。3年位の周期で参加家族の入れ替えがあることを考えると、プログラムの内容を毎年変化させることは必要であろう。しかし、このプログラムは毎年参加希望者が多いことと、東海学院大学食健康栄養学科の協力を得て給食経営管理実習室を活動の場として実施していることから、学園全体で子育て支援に取り組むシンボルとも捉え、毎年継続したプログラムとしている。そのほかの継続プログラムは、行事と関連したクリスマス会が上げられる。



図ー2 「粘土あそびのクッキー」全景

A. 実施概要

プログラムは、一卓のテーブル（15テーブル用意）に一～二組の家族とし、各テーブル、学生2名（必ず二年生1名、一年生1名を一組とする）がつき、クッキー作りの支援を行う。活動は、クッキーの生地作り（白・茶・緑の三色）

から始め、この活動の核ともいえる生地を粘土に見立てた造形活動（遊び）、焼き上げ、クッキーの試食、お持ち帰りまで楽しめる内容になっている。

実施の準備に関しては、担当表や日程の作成ならびに食材の購入が上げられる。担当表は、駐車場や給食経営管理実習室までの案内（6名）、受付（3名）、託児（必要に応じ3～4名）、クッキー作りの支援（30名）等役割に応じて各自担当箇所へ責任をもてるように配属する。クッキー作りの支援以外の学生は、担当の役割が終わりしだい、または、役割が必要でなくなった場合、あらかじめ決められたテーブルで支援の補助に当たるようになっている。このため、延べ40名ほどになる役割分担表を作成しなくてはならない。さらに、当日は他ゼミからの参加や四大子ども発達学科の学生も支援に当たるので、その分も加える必要があるため、かなり複雑な作業となる。これらの理由から、担当表はゼミ担当教員が作成する形を取っている。また、食材・材料の購入に関しても、現時点では予算等の関係から、教員が買出しを行っている。担当表に関しては、前述の理由から教員の作成も止むを得ないと考えているが、食材等の買出しに関しては、幾度も活動を重ねているので、主体性や計画性を培うために学生に任せる方法を検討する時期に来ていると考えている。このほか、一度に70～80人位の参加を想定した大量の調理用具・器具が必要となるが、その点は、食健康栄養学科の全面協力で問題なくクリアしている。この一点からもこのプログラムは食健康栄養学科の援助なくしては、実施不可能な活動である。また、食健康栄養学科とのコラボレーションは、学園全体で子育て支援に取り組む象徴としても有意義であると考えている。

B. 実施準備

ここでは、実施に至るまでの準備段階の取り組みを説明する。

このプログラムは食品を扱うため、食の安全を第一に考え取り組むことが必須となる。そのため、プログラム本番に備えては、実施のための講義（1コマ）、リハーサル（2コマ）と十

分に時間をかけて行っている。

クッキー作りの講義は実施初年度を除いて、毎回必ず二年生が主となって一年生に教える形を取っている。この方法は、二年生にとっては、一年生に自らが説明しなくてはならないという責任感からか、自然に学習意欲が高くなり、習熟度も上がるという良い結果につながっている。また、一年生にとっても、二年生から教示されることは、教員からとは違い自身の将来の姿を具体的に描くことが出来るためか、通常の講義より集中している姿勢が見受けられ、一・二年生双方に良い相乗効果を与えていると考える。

リハーサルは、実施場所である食健康栄養学科の給食経営管理実習室で行っている。この中で、二年生から一年生に食品を扱う必須事項を伝えるが、これに加えリハーサルでは、協力を仰いでいる食健康栄養学科の先生によって、専門的見地から食の安全性と衛生管理に関して丁寧に指導される。講義の段階でも二年生から伝えられるが、リハーサルの中での食の専門家からの教えは、子細に渡りきめ細やかに、具体的に指導されるので、確実に身に付けることが出来ると考える。

以下、ここでの指導事項を箇条書きに示す。

- ①食の安全性と衛生性を守るために、清潔な服装と身だしなみを心掛ける（エプロンを着用する、手を洗う、つめを短く切る、マニキュアはしない、長い髪は束ねる、前髪など髪の毛がでないように三角巾をかぶる、装身具は身に付けない）。
 - ②給食経営管理実習室の食堂には、机など子どもにとって危険な物（机の高さがちょうど顔のあたりになり怪我をする危険性高い）が多いので子どもをしっかりと見守りながら活動する。具体的には、クッキーが焼きあがるまでの待ち時間、子どもが走り回らないように上手く接することと、製作中に椅子から転げ落ちないように注意することが上げられる。
 - ③作業の行い易さを考えて、材料や調理道具を事前にセッティングする。
 - ④材料の計量は正確に行う。
- 以上であるが、特に①に関しては、異物混入や

食中毒の危険性についてしっかり話し、食と保育・教育の専門家を育てる食健康栄養学科と幼児教育が協力して行う子育て支援活動の食のプログラムとしての責任を果たすため、ただ美味しいだけではなく、その安全性と衛生面を考えて作業することの重要性が学生に確実に伝わるようにしている。

C. 支援の実際と活動記録の検証と考察

「粘土あそびのクッキー作り」実施による学生の育ちと学びに付いては、「あそびの森」活動記録（一年生・二年生）の記述から、1）支援内容、2）支援の反省点と成功点、3）支援を通して学んだことに分け、生の学生の声を基に明らかにする。

1) 支援内容

支援の道筋は、挨拶から始まり、自己紹介、着替えの指示と支援、手洗いの指示と支援、テーブルへの案内、材料の用意と計量、クッキー作りの支援（生地作り、形作り、焼成の準備）焼きあがるまでの待ち時間の対応、完成時の言葉掛け、見送りの順で行う。この内容に関しての学生の記録を原文の意味を損なわないように記述し、その学びと気づきについて考察する。

・支援内容の学生の記録より

- ①入り口で「遊びの森」に来てくれた参加者に笑顔で明るい挨拶をする。（一年生）
- ②子どもの緊張をほぐすため名前で呼んだ。（一年生）
- ③テーブルに案内し、荷物を置く場所を教え、エプロンと三角巾をつけて手を洗うように説明する。このとき、子どもの着替えや手洗いを支援し（蛇口に手が届かない子どもを抱き上げて洗えるようにする）、自分も一緒に手を洗う。
- ④材料の準備をする。「これ何かな」と問いかけをしながら材料の名前を説明し、クッキー作りに興味が持てるようにする。（二年生）
- ⑤マーガリンを練るときは、時間がかかるので、交代したり、言葉掛けしたりして、子どもが飽きないようにする。（一年生）
- ⑥小麦粉をふるうとき「さらさらだね」「雪みたいだね」と小麦粉の質感を伝える。バニラエッセンスを加えるときは、「いいに

おいがするよ、ほら！」と感動を共有したり、「クッキーがおいしくなるように魔法の液を入れるよ」と遊び心を入れたりした。ココアや抹茶を加えるときも「チョコレート
の匂いがしてきたよ」「きれいな色だね」
などと声をかけ共に香や色の変化を楽しむ。
(二年生)

⑦生地を混ぜるとき、初めのほうは柔らかく、混ぜやすいので子どもに混ぜてもらおう。その時、「がんばれ」「すごい〇〇ちゃん上手だね」と意欲を促す。子どもができなくなったら交代してよく混ぜるまで混ぜる。(二年生)

⑧材料を混ぜるとき、袖が汚れそうになったので袖を上げる支援をした。説明するとき子どもと目線を合わせて、分かりやすく説明した。みんなが出来るようにタイミングを計りながら順番にする。やり続けている子どもには、「大丈夫？疲れていない？」と声掛けをする。(二年生)

⑨親に手伝ってもらったときは、感謝の言葉をかける。(二年生)

⑩子どもが作った物に「かわいいお花が出来たね」などと言葉掛けし意欲を高める。

⑪形作りが出来ない子には、一緒に作ろうと誘い作って見せる。(一年生)

⑫焼いている間は、「クッキー焼くところ見る？」と声を掛け、見えるところまで連れて行き、「あの機会焼いているんだよ」などと話し期待感が膨らむようにする。(二年生)

⑬焼いている間は、たくさんの子どもと関わり話したりした。(二年生)

⑭出来あがったクッキーを見て一緒に喜び褒め言葉をかけた。(二年生)

・考察（一・二年生の支援内容）

記述内容は、主だった支援内容を箇条書きにしたものが多いが、その中から学生個々の気付きや支援の工夫等を読み取ることが出来る。

準備段階から参加者への支援の基本的な対応は入念に指導している。ただ、日ごろの学生の資質・気質や能力から、果たしてケースバイケースで臨機応変に対応できるか否か、少

なからず危惧を抱いていた。しかし、実施当日は、大方の学生が自らその時々状況に応じて、誠実に支援を行うことが出来たと考える。また、記録から読み取れるように、日ごろの講義を応用しつつ、学生自身の言葉や行動で支援が行われていた。これは、地域の親と子に関わる中で、元々持っている幼児教育を専門に学ぶ学生の保育マインドが引き出されたことに加え、支援の必要性の中から自然に専門科目で学習している様々な内容が総合的に発揮された結果からではないかと考える。ちなみに学生の記録から抜き出した文章の中で下線を引いた部分は、学生自身の気づきによって行った支援の内容である。いずれも誠実に対応しており、学生の記録③④⑥⑧⑫の下線部の記述に見られるように、子どもに実際に接した時の子どもに対するきめ細やかな気遣いや、記録⑨にあるように、保護者に対しても気配りが出来ている。このことを見ると、このような実践的活動が如何に保育者・教育者の人材育成に有意義で必要不可欠なことであるかが証明されていると考える。

ここで取り上げた学生の記録は、二年生の記録が大半を占めている。理由としては、未経験であったためか、一年生の支援の内容の記録は単なる支援内容の説明に終始し、自身の気持ちや意見をあまり見受けることができなかったからである。こういったことから、実践的な体験を積み上げた二年生の確実な成長の証が確認されたのではないかと考える。

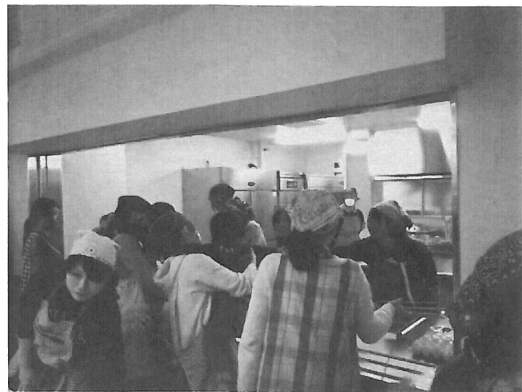


図-3 「クッキー焼くところ見る？」

2) 支援の反省点と成功点

「支援の内容」は、主に全体の流れの中で行った支援に付いての大まかな記述であった。この項目では、その内容の中で行った個々の支援に関しての反省点と成功点が具体的に記述されている。それぞれの支援の過程での、学生の気付きと育ちを検証するに当たっては、分析し易い重要な記録となると考えている。ここでは、一年生と二年生の反省点と成功点を別々に分けて学生の記録を抜き出し、その違いを比較検討しながら検証を進める。

・学生の記録より（一年生の反省点）

- ①はじめて子どもや保護者と接し、どう話してよいか分からず、自分から話しかけることが出来なくて残念でした。先輩は、親子に自分から話し掛けたり、声かけをしていたのすごいなと思った。
- ②先輩の様子を見ていると私とは違い、子どもたちに積極的に話しかけたり、腰をかがめて子どもの目線で話したりしていたので、子どもたちがとても話しやすかったのだと思いました。
- ③作業のとき、子どもとどうやって会話すればいいかわからず、先輩の横でボーとしていたが、先輩の姿を参考にして午後の部からは、子どもとかかわることができた。
- ④生地を作っているとき、なかなか子どもが作ろうとしないので、私たちがほとんどやってしまった。もう少し言葉掛けしやってももらえるようにするとよかった。
- ⑤抹茶の粉を入れすぎて、生地がばさばさになってしまった。はると君が形を作りにくそうにしていたのでとても反省した。
- ⑥二人姉妹の支援では、まだ小さくてどこまで支援したらよいか分からず戸惑ってしまった。私が最初に作って見せてから「出来るかな？」と言葉掛けしていくといいと思いました。

・考察（一年生の反省点）

一年生の反省点の①②③④では、コミュニケーション能力の不足を読みとることが出来る。プログラムの実施の中では、一年生の他者に関わる力の弱さを毎年実感している。未経験

である点を差し引いても、保育系を目指す学生として、人とかかわりはある程度備わっているであろうと考えていた。しかし、今のところ毎年その期待は裏切られている。これは、現代社会が抱えている若者の資質や気質の表れであろうが、保育者・教育者を希望する学生は、確かなコミュニケーション能力の上に専門的知識・技術が備わってこそ、現場で有為な人材として機能すると言ってよい。その観点から捉えたこの支援活動の中での重要な点は、記録に見られるように、親子とかかわりに関して、先輩がよい見本となり、主体的学習につながっているところにある。記録の端々に先輩の支援の姿と自身との違いに関して具体的に記述されており、その影響が一年生のコミュニケーション能力を高め、不慣れな中でも、親子支援が前向きに行われるようになった原因であると考えている。まさしく生きた学習の一例といってよいであろう。このような学びが、バランス感覚を身に付けた保育者・教育者を育てるためには必要不可欠であると考えている。

記録 ⑤⑥では、生地作りや生地を粘土に見立てた形作りの支援に付いての反省点である。⑤では、粘土の代わりとなる生地作りの支援を適切に行えなかった反省が述べられている。支援した子どもの個人名が書かれ、自身の責任が果たせなかったことを深く内省している。この記述から、ここでの失敗は必ず次の適切な取り組みに活かされていくのではないかと考える。⑥の記述では、子どもの適齢を考えた支援のあり方の必要性を学生が自ら感じ取り、その方法を探り出している。これは、「あそびの森」での活動が、課題を自身で見つけ、その答えを導き出す主体的学習の場と機会となっていることの証であろう。児童教育学科の人材育成のテーマとし掲げている「自己教育の可能性を開く保育者・教育者養成」という観点からも、効果的な成果を上げていると考える。

・学生の記録より（二年生の反省点）

- ①生地の量が多すぎて、子どもが飽きてしまう場面がありました。年齢にあわせて生地の量を変えてもいいのではないかと思います。

- ②テーブルとテーブルの間を走り回ったり、じゃれたりして遊んでいる子どもがいたので、熱いプレートを持って歩いているとき危険だと思いました。焼き上がりを待つ間も、退屈しないように何か配慮すればよかったと感じました。
- ③子どもにやってもらおうという意識が強く、親さんを交ぜてのあそびがあまり出来なかった。
- ④作る過程で、子どもたちにとって難しい箇所はどこなのか、把握しておくべきだった。
- ⑤支援の中で、子どもたちに色々聞かれたとき、あいまいな返事しか出来ないことがあった。クッキー作りの講義のときや練習のときにもっと勉強するべきだった。
- ⑥生地を捏ねるとき、まだ子どもには硬いと思い、その部分はほとんど学生で済ませてしまった。変化の様子は子どもたちに見せたが、実際にはほとんど捏ねていないので感触を体験させてあげることが出来なかった。そこが残念でした。

・考察（二年生の反省点）

二年生の反省では、コミュニケーション能力の至らなさが主たる反省点となっていた一年生とは違い、製作の過程での支援事項に関して、問題となった点が具体的に上げられ、改善策に関して記述されている。わずか1年の差ではあるが、これらの内容からは、二年生が確実に成長を遂げていることを窺い知ることが出来る。

この二年生も、一年生のころは親子との接し方に戸惑い、先輩が自然に言葉掛けしている姿に感嘆し、そこから多くのことを学び取っていた。しかし、そこから「あそびの森」プログラムを前期に二年生のみで1回実施し経験を重ね、さらに幼稚園実習、保育実習（保育所・施設）を併せて約2ヶ月間の実習を体験している。わずか1年と記述したが、この間、二年生は、実に多様な実践的体験を積み重ねている。このことが、二年生の成長を加速度的に促していると考ええる。

①②④⑤の反省点では、具体的に問題点が記述されており、改善の方法も明確に述べられている（下線部）。特に②に関しては、全体計画

の中での改善点を見出し、抽象的ではあるが解決法も記述している。この待ち時間の反省点は、他の学生の記録にも見受けられたので、具体的な解決策として、新たに絵本の読み聞かせや紙芝居のコーナーを設けることを現在検討している。③の記録では、製作する過程での親子支援は、子どもだけでなく、親の参加もバランスよく促す必要性に付いても気付いている。

⑥では、生地作りの中で、つつい手先が出てしまい、子どもが活動する機会と場を保障しなかった自身への反省が述べられている。子どもの成長を促すための支援活動であるべきであったことへの反省であろう。ただ、準備段階の講義のときに、生地をしっかりと捏ねないとしっとり感がなくパサついたクッキーになるので、よく捏ねるように指導していることの影響もあると考える。この点は指導のあり方を改善する必要性が浮かび出てきた。

反省点で記述された二年生の内容は、親子とのコミュニケーション不足云々は少なく、何れも具体的支援の中での問題を提議し、その解決を見出そうとするものであった。このプログラムでの体験を次につなげようとする意識も高く、全体を通して、大きな成長の跡を窺い知ることができたと考えている。



図ー4 生地作りを子どもと一緒に楽しむ

・学生の記録より（一年生の成功点）

- ①午前の部は上手く支援できなかったが、2回目の午後の部は、子どもや保護者と一緒に楽しみながら出来た。
- ②なかなか手で捏ねることが出来ない子どもに「これで粘土遊びしよう」と言葉掛けすると、

捏ね始めたのでうれしかった。

- ③形を作るとき、「なにを作ろうか？」と声かけをすると「ライオン」といって作り始めました。「ライオンってどんな顔していた？」「どんなたてがみだった？」などライオンのことを思い浮かべて作れるように言葉掛けしました。
- ④子どもが「白と黒、混ぜてもいい」と聞いたので「色を混ぜてもいいし、好きなものを作っているよ」と言うと、とてもうれしそうに笑い、いっぱい色々なものを作りました。指示するのではなく、子どもたちのやりたいことが出来る環境を作ることが大切だと思いました。そのことで、子どもにやる気が出、考える力や想像力も豊かになると思いました。
- ⑤形を作るとき、迷ってなかなか作れない子どもにお手本を作って、こうやって作るんだよと声を掛けました。それからは、一緒になって沢山の形を作ってくれました。
- ⑥形を作るときは、子どもの意欲を大切にすることが出来た。また、子どもの様々な発想や作品を見ることが出来たのでよかった。最後に出来上がったクッキーを見て、母親と一緒に喜んでいて子どもの顔が印象的だった。親子と一緒に喜びを分かち合うことが出来ました。

・考察（一年生の成功点）

「あそびの森」のプログラムは、申込者が大変多いが、その親子に良い効果が得られるように、各家族3回程度参加出来るように配慮している。そのため、一部のプログラムを除いて原則午前と午後の部の一日2回実施し、申込者の希望に応えている。①の成功点で述べられているように、大方の一年生は、午前先輩に頼って傍観することが多かったが、午後からは、午前の学びを生かしそれなりに親子に関わることができている。そのことを裏付けるように、ここで取り上げた一年生の成功点はほとんどが午後の支援記録から取り上げた記述である。

午前の部より午後の部のほうが充実した内容になった主な事由は、実践的活動の中で生きた見本となる先輩の姿からの学びと、保育系学生が資質として持っている保育マインドならびに日ごろの学習の成果、若さゆえの柔軟性が重

なって、午前の学びを即午後に生かすことができたためであると考ええる。

②③④⑤では、生地の手捏ね方や形作りの子どもへの支援に関しての具体的な取り組みが書き込まれている。何れも一年生でありながら、子どもの主体的活動を引き出すために、フィードバックの大切さを理解し、随所に子どもの状況に応じた言葉掛けや一緒に作ってみる等、ケースバイケースで援助の内容に工夫が見受けられる。活動記録の「支援の内容」や「反省点」で記述されていたコミュニケーションの問題を少しずつではあるが一年生なりに解決しようとしている様子が窺われる。前述したように、先輩と共同して行う支援活動が総合的学びにつながり、僅か一日の体験にもかかわらず、一年生の成長を確実に促していると考ええる。また、ここでの重要なポイントは、学生が言葉掛けしたことで、子どもたちの活発な活動を導き出し、そのことによって子どもが笑顔を見せたとき、その笑顔に無類の喜びを感じ、深い子どもへの愛と慈しみにつながっていることにある。⑥の下線部にも述べられているように、親子と一緒に喜びを分かち合った幸福感、充実感、子どもの笑顔から得られる喜びが素直に表されている。子どもを慈しみ子どもの喜びを我ごとのように感じる事が出来ることは、保育者・教育者として最も備わっていないと心なを学生が持っている証しであると考ええる。

・学生の記録より（二年生の成功点）

- ①「山に雪が降って白いお山になるよ」と子どもたちが想像しやすいものに例えて、粉をふるう楽しさを伝えることが出来た。粉ふるいを叩くときは、「太鼓のように叩くよ」と伝えて、音が少し出るので、音の楽しさなどを一緒に楽しめることが出来た。今回の支援で、一人で判断して進めるのではなく、みんなに「これでいいかな？」「白っぽくなったかな？」と言葉掛けして一緒に考えることが出来たので良かったと思いました。
- ②去年のクッキー作りでは、子どもたちばかりと関わってしまい、保護者の方とあまり関わることができなかったのも、今年は子どもたちだけでなく、保護者の方にも積極的に話

しかけ、リラックスしてクッキー作りを楽しんでいただけるようにしました。そのためか、「来年も来たい」と言ってもらえることが出来ました。

- ③私たちと親子が全員で作っているという感覚を得てもらうために、生地作りから形作りまで一緒に楽しむという雰囲気を作るように、積極的に声を掛け、子どもたちはもちろん保護者の方ともコミュニケーションをとりながら、クッキー作りを進めることが出来た。
- ④最初の説明の時、子どもに多く関わったことで、早く慣れてくれた感じがしました。支援した家族の下の子どもは、慣れるのに時間がかかると思ったのですが、考えていたより早く親から離れ、クッキー作りを楽しむ姿が見られたので嬉しかったです。
- ⑤6人全員に伝わるようにゆっくり説明し、それから一度手本を見せ、子どもたちが分かるように子どもたちのテンポに合わせて進めることが出来た。
練習のときの失敗を生地作りの支援に生かすことが出来た。
- ⑥子どもたちとのかかわりは、幼稚園や保育所の実習経験を上手く生かすことが出来た。

・考察（二年生の成功点）

二年生の成功点は、クッキー作り全体の流れを考えながら、親子共々楽しめる支援のあり方に付いて踏み込んだ記述がなされていた。さらに、一年生と同様に生地作りや形作りで、上手くいった支援の内容も具体的に述べられていた。しかし、①の記録に見られるように一年生とは違い、言葉掛け一つ取ってみても、子どもの想像力ややる気を促すために、一つ一つの言葉が豊かな内容を含み豊富になっている。記録にある「山に雪が降って白いお山になるよ」や「太鼓のように叩くよ」の言葉掛けは、技術的支援を絵本の読み聞かせのように情感豊かに伝えることが出来ている。言葉自体で、子どもたちの感受性や想像性を触発することが出来ているのではないかと考える。また、②③に見られるように、一年生のときは子どもの支援で手一杯という感であったが、二年になるとそのときの反省を生かし、保護者も含めた支援のあり方を工

夫している。さらに、④⑤にあるように家族構成や子どもの年齢を考慮した支援方法を考えて実行し、それなりの成果につなげている。最後の⑥では、多様な実習で培った（二年生は、この時点で教育・保育・施設のすべての実習を終えている）子どもとの関わり方など、積み重ねた体験から来る自信を読み取ることが出来る。

このように二年生の記録からは、支援全体の流れを把握した中で、親と子のかかわり方をケースバイケースで考えながら、余裕を持って支援を進めることができていたことを窺い知ることが出来る。ゆとりを持って支援することが、参加者にリラックスできる安心感を与え、その場と支援する学生に慣れ親しむことにもつながっていると考える。さらに、子どもの想像力や意欲を高めるための言葉掛けの内容等も充実しており、この2年間の成長が形となって表れている。

3) 支援を通して学んだこと

活動記録のまとめとなるこの項目では、一年生と二年生の記録を同時に比較し、学びの成果を検証する。また、これまでとは異なり、学びの内容を「保護者からの学びと」「子どもへの支援からの学び」に分けて、それぞれに検証と考察を行う。

・学生の記録より（保護者からの学び）

- ①クッキーの支援をしながら、保護者の方と会話をしたとき、この子は「作ることが好きで、家でもよくやりたがるんですよ」と話され、子どもの活動を優しいまなざしで見守っていた姿を見て、じっと見つめるだけでも子どもは安心して活動できることを学ぶことが出来た。また、保護者の方とかわっていく中で、子どもの性格や年齢を考えた言葉掛けを学ぶことが出来た。（二年生）
- ②一年生のときは、目線を合わせて会話をしたり、保護者の方と会話する先輩の姿から多くを学びましたが、今回は親さんたちの子どもへの接し方やその愛情あふれる温かい雰囲気を感じ、こういう雰囲気を保育の中でも作れたらいいと思いました。また、形作りのときも、口うるさく子どもが作ったものを否定することなく、自然な優しいまなざしで子ども

の活動を見守る姿に感心しました。これから就職する中で、保護者とのように付き合うかを考えることが出来ました。(二年生)

- ③保護者の子どもに対する支援も様々あると学んだ。子どもの発想を大切に自由で作らせる保護者もいれば、こどもの作ったクッキーを直したり、教えたりする保護者もいた。どの子も作ったクッキーを見て、とても喜んでいたので、作ったものが完成した時は嬉しいものなのだと感じる事が出来ました。(一年生)

- ④「この子は手が汚れるのが嫌いです」と母親が言いました。子どもも生地を捏ねるところで「手汚れる。嫌い!」と言っていました。しかし、ココアを混ぜると喜んで捏ねだしました。それを見た母親も喜び「来てよかった」と言ってもらいました。子どもに楽しんでもらうことが一番ですが、親にも楽しんでもらうことが大切だと学びました。今回は、親とのコミュニケーションの仕方など多く学ぶことが出来ました。実習の前だったので、活動に意欲的な子どもとそうでない子どもへの対応を先輩から学ぶことも出来たのでよかったです。(一年生)

・考察(保護者からの学び)

保護者からの学びで、一年生は、子どもの支援だけではなく親とのコミュニケーションの大切さとその必要性を感覚として学び取っていることを窺うことが出来る。しかし、親から学ぼうとする姿勢は薄く、先輩の支援姿勢からの学びに関する記述が大半を占めている。また、あくまでも子どもが中心で、近い将来、毎日のように関わる保護者に対するまなざしは、客観的に見ているが、その中に傍観視するよう姿勢が見受けられるような記述も見られた。さらに、具体的に何を学び、如何に生かすかという考察も希薄であった。

一年生とは異なり二年生になると、支援の中での保護者と子どもとのかわりからの学びを具体的に記録し、その学びからの展開まで記述が及んでいる記録が多かった。特に保護者からは、①②の下線部に見られるように、言葉掛けだけでなく、愛情をこめて見守ることの大切さ

も体験の中で学び取っている。こういった気付きから、二年生の大きな成長の跡が見受けられる。保護者にしっかり視線が向いている理由としては、就職を間近に控え(ほとんどの学生が幼稚園・保育所等に内定している)、保護者とのかわりを重要な職務と理解し、明確な将来ビジョンとして捉えられていることも上げられるのではないかと考える。実際、多くの二年生の記録には、この学びが就職したのち、保護者とのかわりに生かすことが出来るよい経験として捉えられていた。一方一年生は、実習の経験も無く(1月下旬から幼稚園の参加実習が始まる)、「あそびの森」の支援も初めての体験となる。多くの体験を積み重ねた二年生とは差が出るのは当然といってよいであろう。しかし、記録にあるように実習に向けての生きた体験として勉強になり、幼稚園や保育所で子どもと関わったとき役に立つ等、近い将来を見据えた前向きな記述が多く、これから始まる実習を見据えて学習をしなくてはならない一年生の現状をよく反映した意見であると考ええる。また、この実践的体験は、一年生にとって保育者・教育者としての専門的知識や技術を学ぶ上での、よい動機付けの機会と場となっているとも言える。

・学生の記録より(子どもへの支援からの学び)

- ①2歳の子は、まだ上手く作ることが出来ないで、どう支援したら楽しさを味わえるかを考えて支援することが出来た。まだ幼いから出来ないのではなく、その子どもでも出来ることを探すことの大切さを学びました。(二年生)
- ②子どもたちの顔の表情や手の動作などをよく見ていると、やってみたそうにしていたり、どうすればいいのかわからなくなっていたりするのが読み取れました。口数の少ない子どもでも、しっかりそういった点を観察していると、その子どもの気持ちを知ることが出来、それに応じた声掛けや援助をしました。子どもが楽しんで活動するためには、言葉だけではなく、顔の表情や動作を観察しながら支援することの大切さを学びました。(二年生)
- ③3歳の子は、粘土あそびの経験がまだ無いようで、クッキー生地をもてあましていよう

に見えました。しかし、潰したりつなげたりしながら、自分なりに何かやろうとする姿が見られてよかったと思いました。また、年長や小学生になると、粘土の要領で色々な形を作って、創意工夫する姿が多く見られました。年齢によって、出来ることと出来ないことがあることを理解し、それに合った援助をすることの大切さを学びました。(二年生)

- ④保育者の声かけや支援の仕方、子どもたちの活動がすごく変わるので、常にいい援助方法を考えることの大切さを学びました。子どもたちと楽しく、色々な活動が出来る保育者になりたいと思いました。(一年生)
- ⑤しっかりとした大きな声で説明しないとみんなに伝わらないことが分かりました。一対一で話すときは、普通の声でも大丈夫ですが、周りが大勢だと自分の声が消されてしまうので、大きな声ではっきりした言葉掛けが必要だと学びました。また、クッキー作りに没頭してしまい、子どもが危険な行動をしているかどうかまで目がいかなかったので、視野を広げて、全体をしっかりと観察することの大切さに気がきました。(一年生)

・考察（子どもへの支援からの学び）

子どもからの学びで一年生は、④⑤に見られるように、言葉掛けの大切さやその掛け方の方法に関して学んだという記述が大半を占めていた。一年生にとっては、参加した親子と積極的にコミュニケーションを取ろうとしている先輩の姿から多くを学び、その必要性を感じ取ることが、確かな学習につながっていると考ええる。そのことは、経験不足ながらも先輩に触発され、一生懸命に言葉掛けしながら親子と関わろうとする姿が、学びの項目だけでなく、この記録全体から読み取ることが出来る。このことから、この実践的体験で得た学びが、確実に学生の身に付いていると確信している。この確信は、⑤の下線部に見られるように、全体を観察して支援することの大切さを一年生であるのにも関わらず、自ら気付き記録に残していることから窺い知ることが出来る。

一方二年生は、これまで積み上げた体験からの余裕であろうか、一年生と同様言葉掛けの

大切さを上げているが、内容は一步も二歩も踏み込んだ記述となっている。①～③の記録の下線部に見られるように、子どもの顔の表情や動作を良く観察し、その状況から子どもの気持ちを読み取り、その時々状況に合った言葉掛けの必要性を学びとして上げている。また、多様な年齢（未満児から小学校低学年の子どもが参加している）の違いを考え、適齢や個々の発達に合わせた言葉掛けと具体的支援の方法に関しても、大切な学びとして上げている。このことで分かるように、二年生の学びは具体的且つ実践的内容となっており、例えば③に見られるように、粘土遊びの発達過程を考え、握ったり潰したりする感触遊び的な活動から、ただ穴を開けたりつまんだりした形に意味づけをする活動、そして結合しながら目的を持って色々な形を作ることが出来る活動など、それぞれの活動・年齢を考えて、講義で得た専門的知識をケースバイケースで臨機応変に応用することが出来る能力を身に付けつつあるのではないかと考える。

D. 学びの総括

「あそびの森」での親子支援の活動記録から取り上げた一年生と二年生の学びの違いを端的に述べれば、入り口にある学生と出口にある学生の違いと言えるであろう。入り口にある一年生は、この体験をこれから始まる学習（特に実習）に重ね合わせ、学びのテーマを主体的に見出し、学習の動機付けにもしている。実際に地域の親子と関わる実践的体験だからこそ、参加者のために上手く活動ができるように必死になって準備し、支援しようとした経験が、責任感を育て、保育者・教育者を目指す学生としての自覚にもつながり、知識や技術面だけでなく心の成長をも促し、バランスの取れた人材育成という観点から効果的に成果を上げていると考える。また、二年生にとってこの活動は、短期大学での学習の総決算的意味合いを持ち、保育者・教育者としての準備や心構えを再確認する機会と場ともなっているといっていよい。記録にも見られるように、この体験で身に付けた親子のかかわりを職場でも生かしていけるなど、現場で働く姿を想定した記述が多く見受けられた。

全体として、一年生は、参加する親子からは勿論のこと、二年生からも多くを学び取っている。二年生を保育・教育を目指す学生のあるべき姿と捉え、近い将来の自身とも重ね合わせることで、これからの学習にもこの体験が生かされていくことになる。また、二年生も、一年生と共に支援することで、先輩としての意識が触発され、日ごろより強い責任感とリーダーシップを発揮することが出来、支援での学びと共に強い自律心をも培うことにつながっている。このように、「あそびの森」の造形あそびのプログラムで、一年生と二年生が共に支援する中で、互いに刺激しあい、よい意味で相乗効果を生み出している。さらに、保護者や子どもからの学びも加わることによって、通常の講義では考えられないほどに、保育者・教育者としての力量形成の成果を導き出しているのではないかと考える。

E. 改善点に関して

「粘土あそびのクッキー作り」は、概要で述べたように、おやつ作りに粘土遊びの要素を取り入れた食育と造形表現遊びをあわせたプログラムである。そのため、一般的なクッキー作りとは異なり、造形活動面を重視し、星型などの抜き型を使用しないで形作りを行っている。型抜きは、簡単に整った型が出来便利ではあるが、それは、あくまでも鋳型のようなものであって、子どもが想像力や創造性を働かせる余地も少な

く、表現遊びのプログラムとして、意味が薄く魅力の乏しいものになってしまう。また、支援する学生にとっても、型抜きを使うことで、子どもの想像力を引き出すための言葉掛けの機会も減り、関わりが希薄になることにもつながりかねない。さらに、その豊かで自由闊達な表現を目の当たりにし、保育者としての心を拓ける体験も少なくなってしまうであろう。

型抜きを使用しない点以外は、普通のクッキー作りの活動となる。しかし、ゼミを担当する私自身の専門が造形表現であることから、おやつ作りに関しては0からのスタートであった。それに加え、私が思っていた以上に学生はお菓子作りに関する基礎的な知識や技術が乏しかった。そのため、初年度はクッキー作りのレシピを数種類調べ、食専門の先生にもご教授願ひ、大学が行う食と表現にかかわる子育て支援プログラムとして、有意義な内容になるようにクッキー作りに関する基本的レジュメを作成し、学生への指導を徹底した。しかし、お菓子作りはあくまでも嗜好品なので、食育の理念だけに囚われることなく、参加者や学生の要望も大切にしながら毎年改良を重ねてきた。その主な改良点を次に纏める。

①**砂糖の量** 甘味に関しては、地域の大学として、また食健康栄養学科の協力を仰いで行うため、子どもの味覚を育てるという食育を考え、初期は甘さをかなり押さえたレシピ（10人分・砂糖 100～120g）で行っていた。しかし、あくまでも嗜好品であるおやつ作りという点を考え、こちらの理想を追うだけでなく、子どもや保護者の希望や学生の意見も尊重し、年々砂糖の量を増やしてきた。その結果、甘み押さえ加減が 150g、普通の甘さ 180g のどちらかを選択する方法で定着するようになった。

②**計量表の作成** 初回から三年ほど、学生に配布するレジュメにクッキーのレシピ欄を設け、小麦粉や砂糖などの分量に関して、入念に講義を行い支援に臨んでいた。しかし、支援する参加者の人数がテーブルによってばらつき（4～12人）があることと、プログラムの参加者が多い時は80名ぐらいいなり大混雑することから、計量のミスが随所に見受けられた。その



図－5 規格はずれのクッキーのアンパンマン

為、2～15人分の小麦粉、砂糖、バター、卵の計量表を作成して、計算間違いが起こらないようにした。計量表の使用によって、活動もスムーズに進むようになった。初年度から数年は、この程度の計算は問題ないであろうと、計量表の導入に否定的であった担当教員としては、その考えの甘さが反省点として上げられる。

③捏ねる時間 初回から1～2回であるが、クッキーがバサついてあまり美味しくないグループが数箇所出た。生地が十分に捏ねられていないことが原因として浮かび上がったので、練習時にしっかり捏ねて生地を作ることを徹底した。よく捏ねた、シットリとしサクサク感あるクッキーを味わうことによって、その必要性を認識させた。

④クッキーの厚み クッキーの焼成は、家族単位で大きなプレートに載せ、給食経営管理実習室の大型オーブンで大量に焼き上げるので、厚みに差がありすぎると、薄いクッキーは焦げてしまった。そのため、形の大きさはある程度自由に製作するようにし、厚みに関しては約1cmを目安にした。

⑤砂糖飾りの導入 クッキーを彩る砂糖飾りは、開催から四年目位に学生からの要望で取り入れることにした。担当教員としては、純粋にクッキー生地を粘土に見立てた造形遊びにこだわりがあり、型抜きなどを含め余分なものは使わない方針であった。しかし、砂糖飾りを使ってみると、その多彩な色と様々な形状が、造形遊びに広がりを与え、学生の支援の選択肢も広がり、内容の充実化につながったのである。教員の思いだけでことを進めるのではなく、学生と共に考えることの大切さをここでも知ることが出来た。

以上、参加した親と子がクッキー作りを大いに楽しみ、有意義な時間を過ごせるように順次改善を積み重ねた。

おわりに

造形遊びとおやつ作りを兼ねたプログラムで、食に関しては専門外の私が、少しでも参加者に喜んでもらえるようにと、美味しいクッキー作りを目標に、学生と共に試行錯誤した時間は、

互いに有意義で楽しい体験であり、得るものも多かったと考えている。また、参加した親と子からも学生は多くを学び、さらに、一期一会の精神で一生懸命支援する中で培うことが出来た保育者・教育者としての心の成長も、計り知れないものがあると考ええる。

本稿のタイトルにある、「造形遊びの親子支援における保育者・教育者養成の力量形成の成果」としては、この社会的貢献活動を体験することによって、学生のボランティアマインドを培い、造形活動の親子支援とおやつ作りに関する知識・技術を主体的に学ぶことが出来た。さらに、責任感と計画性を育て、専門性と心の育ちをバランスよく身に付けた保育者の育成につながったと考える。また、大学全般で捉えても、授業の課題として地域の親子に関わることで、社会的貢献活動を活性化し、大学と地域社会との相互理解を深めることが出来た。その結果が、大学と地域社会の人々が力を合わせて共に育てる保育者の養成にもつながっていったと考えている。さらに、地域との共生を使命として掲げる短期大学の教員としても、この体験は意識改革の貴重な場となり、教員も学生と共に人間的幅を広げることとなり、コミュニティーカレッジとしての大学の役割を活性化する可能性を示すことも出来たと考えている。

本稿の核となった「粘土遊びのクッキー作り」の実施に関しては、長年、尾木千恵美先生を中心とした東海学院大学食健康栄養学科の先生方にご指導とご協力、施設設備等の開放など計り知れないご理解とご支援を賜りました。

先生方に心から感謝申し上げ、末尾の言葉とさせていただきます。

〈引用・参考文献〉

- ・「あそびの森」活動記録、東海女子短期大学・東海学院大学短期大学部 児童教育学科 幼児教育専攻造形ゼミ学生
- ・子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告 1～7、2006 年～2012 年、若杉雅夫他、東海女子短期大学紀要 32 号～34 号・東海学院大学短期大学部紀要 35 号～38 号.
- ・子育て支援プログラム「子育て親育ち・学生の心の育成」—あそびの森の試み—、2006 年、若杉雅夫他、東海女子短期大学紀要、32 号.
- ・地域社会とともに育てる保育者養成、2008 年、保育士養成研究 第 25 号、若杉雅夫・篠田美里、全国保育士養成協議会（実践報告）